

有識者

伊藤 昌毅氏（東京大学生産技術研究所 特任講師）

インタビュー概要

産業構造変化と交通

- 価値が生み出される際の、人と人が顔を合わせる場の重要性が再認識されてきた。産業が生み出す価値を極大化するという視点から都市におけるモビリティの重要性は高まっていると言える。
- 千葉市が東京に労働者を供給するという性格の都市ではなく、産業の拠点としての都市を目指すのであれば、産業を支える人が集まりやすい交通、という機軸で交通のあり方を考えることが必要である。

MaaSの展望と進展のキーポイント

- MaaSが目的としているのは自動車交通から公共交通へのシフト。一定の人口規模がある都市ではシェアに経済合理性や利便性があることから、MaaSに向かっていくことは間違いない。
- MaaSの進展には交通の統合が求められるため、誰が司令塔となり、どのようにして関係事業者の統合・連携を進めていくかというところがポイントとなる。

自動運転が実現する未来社会

- 自動運転が導入された社会では道路標識は不要となり、また、車間距離が狭まることで従来よりも車線が少なくて済むため、歩道のための空間が増える。駐車場も不要となり、都市部の空間に余裕ができる。物流面では運転手不足の解消、タイムロスの削減が期待される。

オープンデータの重要性

- 交通における具体的な課題を議論するうえではデータを可視化することが重要で、事業者が保有するデータのオープンデータ化が政策検討にあたって極めて重要となる。

次世代モビリティ実現に向けた日本の課題

- 技術的な面だけ見れば自動運転社会はそんなに遠くない未来に実現できるはず。実現が10年後か、30年後か、あるいはそれよりも先になるのかはリーダーの決断、社会の選択次第。私としては、「モビリティの未来は千葉にあり」というメッセージを出せるくらい、千葉市が日本を引っ張ってくれることを期待している。